

最古の歌集「万葉集」出典

文学親しみ自然めである

新元号「令和」の出典は現存最古の歌集「万葉集」。基になった一節を探ると、中国の文学に親しみながら自然をめでた当時の貴人たちの文化的な暮らしが浮かび上がる。一方で、さまざまな身分の人々の言葉を収めた歌集によったことを歓迎する声も上がった。万葉集巻5の一節。梅見をしながらの宴会で詠まれた32首の和歌の前に置かれた漢文の序文「初春令月、気淑風和」から「令和」の2文字が取られた。「令」の字には「よい」「清らかなで美しい」といった意味も含まれ、「和」は「まるくまとまった状態」を意味する。

730(天平2)年(旧暦の正月13日、大宰府(福岡県)の伴旅人の家で宴会が開かれた。この部分を現代語訳すると次の通り。「折しも、初春の佳き月で、気は清く澄みわたり風はやわらかにそよいでいる。梅は佳人の鏡前の白粉のように咲いているし、蘭は貴人の飾り袋の香のように匂っている」(角川ソフィア文庫版「伊藤博記注」)。「佳人」とは美しい人のこと。8世紀初めには律令制度が確立した。中国の進んだ文化の影響を受けた高度な貴族文化が育まれ、中国に倣って国史の編さんが進められた。一方、梅見の宴会が行われた後の時代には、

地方での反乱や飢饉、疫病などが相次ぎ、天皇が都を転々とする混乱も続いた。新元号の有識者懇談会に出席した作家の林真理子さんは「梅の季節にはちよつと遅れましたが、素晴らしい元号が選ばれ私も本当にうれしい」「これから万葉集ブームが起るんじゃないか」と胸を張った。日本の古典を典拠とする元号は記録に残る限り初めてとされる一方で、中国文学の影響もうかがえる。「初春令月」は古代中国の書家、王羲之の「蘭亭序」の詩の序文などを模したときれる。

中国の字ですが、日本の書物の中で日本人が使ってきた。その言葉の中から選り出したことには意味がある」と語る。その上で「漢文学に通じ、漢詩を作って楽しむ当時の人々の風雅で、のどかな雰囲気がいいますね。春の気分、祝福の気持ちを感じ取れるいい元号です」と好感を抱いている。「一服の清涼剤のような元号」と表現するのは、日本文学研究者のロバート・キャンベルさんだ。万葉集には多様な人々の言葉が歌い継がれており、「社会の分断が見られる今、典拠とされたのは感慨深い」と話す。序文は寒い冬を越えて梅が咲く様子が描かれ「自然と通じ合うという、日本人が古来持つ心とも地続きだ」とキャンベルさん。「さまざまな人々の思いを包摂できる『大きな袋』のような元号になってほしい」と期待した。

「耐え忍ぶ」意味でも「歴代天皇・元号事典」の編者で神戸女子大名誉教授(日本古代史)の米田雄介さんの話。新元号「令和」の「令」は良い、正しいという意味。「和」はやわらか、なごやかという意味で、この組み合わせは意外だった。「令」は元号に初めて使われた。これまで使用例が少なく、比較的発音しにくい「ら行」で始まる文字を選ぶとは思いつかなかった。出典は万葉集だが、文字が引かれた「序」(和歌の序文)は漢文体で書かれている。日本文化の底流には漢籍がとうとうと流れており、出典が漢籍か和書かにこだわらなければならないと思う。この「序」は梅の花をめでる歌に付けられた。「梅」は奈良時代には「寒風」に耐え忍ぶ」という意味で使われることがあった。「令和」の提案者は、これからの時代、国際的にも国内でもさまざまなことが起きるので、足元を見つめながら私たちが新たな時代を築いていくことが課題になる、という時代認識を持っていたのではないかと想像する。

国書の万葉集を典拠としたのは、日本の伝統文化を大事にするという安倍政権の意向を反映したものだろう。有識者や衆参両院の議長にも諮った上で最終決定しているが、極めて限られた人たちが選んでおり、最初から「令和」だったのではないかと。閣議決定後、天皇陛下への報告を待って発表されたのも、天皇と元号の結び付きを感じさせるもので、保守派への配慮だ。日本だけで通用する元号で物事を考える習慣は、世界史を相対化して考えることを阻害する。元号制の弊害だ。

元号離れ進むのでは作家の高村薫さんの話。安倍晋三首相の説明を聞くと、万葉集に依拠した新元号の由来はすいぶん情緒的だ。安倍首相が目指す「美しい国」の実現にぴったりのものだろうが、現代人にとって「令」という字は、国民を律する「規則」のイメージが強いと思う。「和」との組み合わせは「国民を律して和を図る」といった意味にも取れて正直、違和感を覚えた。「れい」という音も冷たい響きで、長く使いたくなくなるような明るい語感ではない。西暦を用いる書類も増える中、ますます元号離れが進むのではないかと。

安倍政権の意向「反映」
神奈川大の中島三千男名誉教授(歴史学)の話 初めて